広島大学附属三原学校園研究紀要　第５集　2015　pp. 225-232

家　庭　科

自分そして家族を見つめる家庭科の授業のありかたを探る

—幼児・高齢者とのふれあいを通して—

藤　井　志　保

1　はじめに

三原学校園には幼稚園，小学校そして中学校と３つの学校があり，12 年間の幼小中一貫教育を行っている。私が本学校園へ赴任して 10 年の月日が流れた。つまり初年度に中学２年生（８年生）の家庭科の授業で幼児とのふれあい体験を行った時に４歳児だった子どもが，現在中学３年生（９年生）になっている。そして，その子どもたちは，自分が幼少期に中学生にしてもらった事を，今度は幼児にしていっている。このように，幼児期から中学生期まで，子どもたちの成長を見つめながら家庭科の授業をおこなってきた。

この年月の中で改めて実感したことがある。それは，子どもたちの成長発達に応じて，これまでの自分も見つめさせながら授業を行うことは，子どもたちがこれからの生活の自立を目標とし「多くの人々に支えられていることに気付く」ことや「自分自身もその家族の一員であり果たす役割やできることがある」という自覚を促すきっかけになることである。

中学校１年生（７年生）の地域の高齢の方をお招きして共にお話ししながら食事をする「地域の方との交流会」も，地域の方々と交流するのが目的とはいえ，その会を開くまでの準備では生徒たちが各家庭で家族とふれあいながら料理の練習をする。そして，祖父母にアドバイスを受けたり，最後には自分の食生活やそれを支えて下さる家族のことを考える場面もある。

８年生での「幼児とのふれあい体験」では，中学生が隣接の幼稚園の幼児とペアを組み，運動会で共に踊るなどして１年間通して交流し，幼児の成長を実感することができる。そして自分の幼い頃も振り返り，自分を支えてくれている家族へ感謝の気持ちを持つ。

このように中学校３年間の家庭科カリキュラムの中で「幼児とのふれあい」「高齢者とのふれあい」を大きな２本の柱として位置づけ，家庭科の授業だけにとどまらず，道徳や特別活動そして希望（のぞみ）の時間とも関連づけ，学校教育の中で果たす役割を明確にしながら取り組んできた。いずれも「生きる力」を育むことを大きな目標とし「人と人とのかかわり」や「自分を見つめること」を学習の重点事項としている。そして，これらの学びは「家族」と深くかかわっている。さらにはこのように「家族」を意識し，見つめた授業にしていくことで，生活実践力を身につけるための土台となる自己肯定感を高めていくことにつながるとも考えている。

2　研究のねらい

「家庭科で家族をどう教えるか」という問いに迫るために，これまでのカリキュラムを見直し，生徒たちが学んだあしあとの中から「家族」に関係した部分を掘り起こしてみた。そして，その内容を９年生の生徒たちと「家族」という視点から共に学び直し，改めて自分や自分の家族のことについて見つめる時間をとるようにした。

これまで衣食住や幼児に関することなどその分野ごとには深めた内容になるように授業構成を作るよう努力してきたが，それらを「総合的にとらえて」考えさせることが今まで不十分であった。今までの衣食住などの学びを総合的につなげ，自

分のこれからの生活を展望する時間をとることで，より「家族」を見つめ，あわせて自分の生き方を考えるきっかけになると考えた。

「家族」は，自分自身の根幹をなす大切な存在であることはいうまでもない。しかし，生徒のプライバシーへの配慮から「家庭科で家族をどう教えるか」という問いは家庭科教師なら誰もが多かれ少なかれ自分に投げかけてきた問いであると考える。自分もそうであった。そこで，本稿では中学校３年間の家庭科カリキュラムを「自立と共生」という身に付けさせたい力と「家族」という視点から見直した。中学校９年生で，これまで学んだ家庭科の内容の中から家族という視点で全てを総合的につなげる「これまでの学びと家族」という自分と家族について見つめる授業を行った。

本学校園で育った子どもたちが今までの自分をふり返り，これからの自分を考えた。その中で「家族」に対する意識がどのように変容したのかを検証し，子どもたちに自立と共生の力を育む家庭科の指導はどうあるのが望ましいかを探り，今後のカリキュラム作成や題材開発への方向性を探ったものである。

３　中学校３年間の家庭科カリキュラム

表１に示すように，家庭科の３カ年間の学びにストーリー性を持たせている。７・８年生では，家族に支えられ，家族の中で頼ることが多かった自分が，家庭でそして家庭科の時間に，衣食住をはじめとする家族にかかわる仕事や，幼い子ども

表１　中学校３年間の家庭科カリキュラム

７年生　地域の中の自分　自立をめざして

月	学習題材	学習内容	授業時数	学習指導要領
4	ガイダンス	中学校の家庭科で何を学ぶか	1	すべて
5	私たちの食生活	食事のとり方 栄養素の種類とはたらき 食品に含まれる栄養素	11	B（1）アイ（2）アイ
6				
7		家族のためのオリジナル献立（夏休みの課題）		
9	食品の選択と調理	食事作りに挑戦しよう 調理実習Ⅰ スパゲッティミートソース フルーツヨーグルト	10	B（3）アD（2）ア
10		掃除の匠がやってきた（秋休みの課題） 調理実習Ⅱ ホワイトシチュー　トマトサラダ プラマンジェ		
11		バランスのとれた食生活を考えよう		
11	より豊かな食生活	調理実習Ⅲ　和食のよさを知ろう 地域の食材を生かした調理実習にチャレンジしよう		B（3）アイ
12		食品の選び方を考えよう 地域の高齢者の方との交流会の計画と試し作り	12	B（2）ウ（3）イウD（1）イ
1		生活の課題と実践		
2		交流会の振り返り 地域の高齢者の方との交流会		
3		1年間の学びのまとめ 掃除の匠がやってきた（春休みの課題）	1	すべて

８年生　自分を見つめ　共に生きる

月	学習題材	学習内容	授業時数	学習指導要領
4	ガイダンス	8年生の学びの見通しを持とう	1	すべて
5	私たちの成長と家族地域	乳幼児期を振り返ってみよう 幼児の生活と遊び 幼児の心身の発達 子どもにとっての家族	6	A（1）ア（2）アイ
6	幼児とのふれあい	幼児とのかかわり方の工夫 ペア幼児との出会い ふれあい体験学習の振り返り	4	A（3）アイウ
7		衣生活を見つめて バンダナ作りに向けて練習（夏休み課題）		
9	消費と環境	消費者としての自覚 消費生活について考える 生活の中での環境への影響 幼児の食生活について（秋休みの課題）	5	D（1）アイ（2）ア
10	幼児とのふれあい	幼児のためのバンダナの製作	4	A（3）ウC（3）ア
11	私たちの生活とすまい	家族と住まいのかかわり 住まいのはたらき 幼児さんが散歩で中学校にやってくる	6	C（2）アイ
12		よりよい住まいと住み方 健康に安全に住む 幼児さんにプレゼントを作ろう！（冬休みの課題）		
1		バンダナのプレゼントに向けて 幼児さんとのバンダナ交流会 ふれあい体験学習のまとめ	3	A（3）ウエ
2	幼児とのふれあい	幼児の食生活 ペア幼児さんのためのおやつ作り 生活の課題と実践	3	すべて
3		幼児とのふれあいから14歳の自分を見つめて 春休みの課題レポート	1	

９年生　より豊かな生活　将来に向けて

月	学習題材	学習内容	授業時数	学習指導要領
4	ガイダンス	9年生の学びのゴールは	1	すべて
5	私たちの衣生活	衣服のはたらきを考える 衣服を選ぶ 裁縫ミシンの使い方	2	C（1）アイウ
6				
7		衣生活を調べてみよう（夏休みの課題）		
9	私たちの衣服製作	衣服の構成 製作の計画と準備 ショートパンツの製作 ・採寸 ・型紙を選ぶ ・布を選ぶ ・用具の準備 ・布を裁つ ・印つけ ・縫い合わせる ・仕上げ	10	C（1）ア（3）ア
10				
11				
12		伝統を装う～浴衣に親しむ～		
1	衣生活	個性を生かす着装の工夫 パーソナルカラーを探そう	1	
2		ファッションショーの準備	1	C(1)ア
3		ショートパンツのファッションショー		
	まとめ	5年間の家庭科で学んだことと これからの自分	2	すべて

や高齢の方とかかわる実践的・体験的な活動を行い，地域の中で生活していることを感じ，これまでの自分の生き方を振り返る。そして９年生では，将来に向けてこれからの生活を展望して，生活をより豊かにしようとする生活実践力がどれくらい身についたかをふり返る場面を意識的に設けることにしている。

次に，３年間の授業で，自分や家族とつながっている内容を示す。（実践は平成 26 年３月～平成 27 年１月までのものである。）これらの授業では，家族を見つめ，家庭でのそれぞれの役割を感じる言葉があったり，「自分」を見つめて振り返る言葉があった。また，子どもたちを支える家族からの言葉も，子どもたちに影響を与えていることが分かった。

４　中学校１年生（７年生）の授業で「家族」そして「自分」とつながる場面

①中学校の家庭科で何を学ぶか
②家族の食事作りにチャレンジ（夏の課題）
③掃除の匠がやってきた
④高齢の方の食事についてインタビュー
⑤交流会の献立を作ってみよう（冬の課題）
⑥交流会を終えて家族への思いを綴ろう
⑦交流会で学んだことをポスターセッションで発表しよう（保護者参観日）
⑧くらしを見つめて解決

表１のカリキュラムにあるように，７年生では，食品の栄養について学び，献立を立てることができるようになり，その学びを生かして地域の高齢の方をお招きしての交流会を１年間の終わりに学習のまとめとして実施している。

子どもたちには，年度のはじめにこの目標を伝えている。そして，自分の家族のことを考えて，食に関する仕事を行う機会のある課題を出したり，また祖父母など高齢の方とかかわる中で，食べ物の好みや栄養バランスのとれた健康に良い食事のあり方について聞き取りを行うなどの経験を積むことができるようにしている。

また，「掃除の匠がやってきた」と題し，衣食住を見つめて生活の中の課題を発見し，それを家族と共に解決する課題にもチャレンジしている。

あわせて，希望（のぞみ）の時間や道徳の時間そして国語の時間とも連携し，「地域の方との交流会」に関する学習内容を盛り込み，より発展的にそして生活全体と関連づけたり，子どもたちの価値観を揺り動かすような取り組みになることを目標として取り組んできた。７年生という段階では，まだ家庭で衣食住に関するする仕事についてはほとんど家族にしてもらっている毎日である。よって年間を通じて保護者の方々には，家庭科での学びの内容を伝えて，折に触れて協力をお願いしている。そして，少しではあるが家族の方から一言コメントをいただくようにしている。

次の図１は，地域の方との交流会も見通して，４月～７月まで学んだ知識を生かして，家族のための食事作りにチャレンジしようという課題に対してのある父親からの言葉である。

図２は，前期を終えた秋休み前に家の仕事について学び，今の自分がやっていることと家族がやっていることを見つめさせた上で「掃除の匠」になるという設定で行った。同様にそこには家族と共に掃除にチャレンジした姿があった。図３は，７年生の最後の目標である地域の方との交流会を終えた後の振り返りの授業で，家族に向けて綴ったものである。

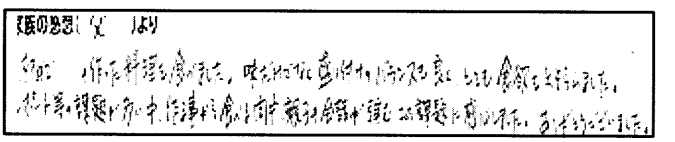


図１　家庭での実践課題「食事作りにチャレンジ」への家族からのコメント

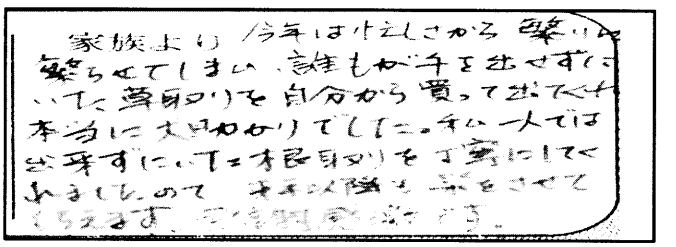


図２　家庭での実践課題「掃除の匠がやってきた」への家族からのコメント

一食分とはいえ，下準備・味付け，盛り付けなどの面でいろいろ苦労しました。そう考えてみると，日頃家で食事を作っている両親はすごいな，と思いました。例えば，煮物・天ぷら・炒め物などを10分～15分ほどで完成させてしまいます。僕達では，真似できないような手さばきの良さに感謝して一食一食食べたいと思います。また，いつもは，そこまで深く食事について考えていませんでした。しかしこの交流会を経験してお母さんやおばあちゃんは栄養や衛生などにも気をつけて作っていると感じました。これは，自分達で作ったからこそ，感じることの出来たものだと思いました。これからは，感謝の気持ちを持って食べたいです。

図３　地域の方との交流会後の生徒の感想

そしてまた，実際に保護者を招いてポスターセッションを行い，１年間の学びを自分の言葉にして発表する機会を設けた。図４にそのポスターと当日の様子を示す。

７年生の１年間の学びのゴールを，地域の方との交流会に設定し取り組んだことで子どもたちは，家族の力も借りながら，または自分が家族のために食事作りをしたりしながら，自分自身の生活と結びつけて取り組んでいた。そして，授業内容を通信や課題を通して家庭へも発信していたので，子どもたちと共に取り組んで下さる家族も多かった。

一人一品の料理を責任持って作るので，その料理について個々と話をしていった。その中で家族とのかかわりが難しい生徒がいることが分かる。家での実践課題を出すときは，必ず「家庭で取り組みが難しい場合は～しよう」という選択肢を設け，学校の授業や生徒からの相談，そしてこちらからのアドバイスで進めることができるように配慮した。

図４　地域の方との交流会のポスターとその発表会当日の様子

5　中学校２年生（８年生）の授業で「家族」そして「自分」とつながる場面

①ペア幼児との出会いそして踊ってふれあおう
②ペア幼児へのメッセージカードを書こう
③自分の幼少期について家族へ聞き取りをしよう
④幼児期の絵を見ながら家族の存在を考えよう
⑤幼児に適したおやつ作りをしよう
⑥ペア幼児へのバンダナのプレゼントを贈ろう
⑦幼児からの似顔絵のプレゼントを通して考える
⑧14歳の春に～１年間の学びを振り返って～

８年生では，隣接した幼稚園の４歳児とペアを組み，年間を通じてそのペア幼児の成長を追う。この幼児とのふれあい体験を柱として，幼児の生活と家族について実践的・体験的な学びとなるようにしている。

自分の幼児期を振り返るために，家族への聞き取りを行い，家族の方からも生まれた頃の様子や気持ちを語っていただくようにしている。また，幼児期の絵を持って来るよう呼びかけると，クラスの中で40人中10名くらいの生徒が持ってきてくれる。その絵を見ると，「絵を１人で描く」のではなくその絵を通じてそこに共に過ごす家族の存在を感じることができるので，子どもの成長を支える家族の存在を，絵を通じて学ぶ。

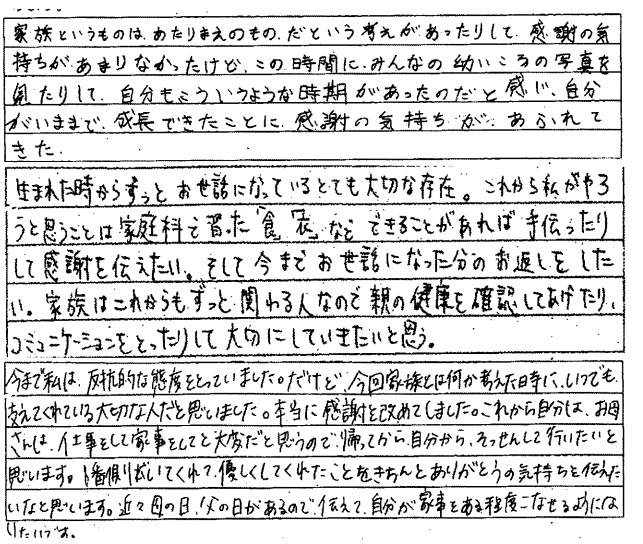
また衣生活とも結びつけ，図６，７に示すようにバンダナの布へ絵や名前などの刺繍をしてペア幼児へのプレゼントを作っている。１年の終わりに，それぞれがペア幼児へプレゼントをする。

このペア活動に関しては，幼稚園の先生とも連携をして，幼児からのお兄ちゃんとお姉ちゃんの似顔絵のプレゼントをいただいたり，幼児のつぶやきなどを聞き取ったものを中学生に伝え，自分の幼児へのかかわりを見つめさせることをしている。最後に，１年間の学びを通して14年間生きてきた今の自分を振り返るレポートを書くようにしている。特に，自分を見つめる活動を大切にして家族とのかかわりについては，個に応じて見つめることができるようにしている。

6　中学校３年生（９年生）の授業で「家族」そして「自分」とつながる場面

①家族って何だろうⅠ～これまでの自分・今の自分・これからの自分～
②家族って何だろうⅡ～幼児とその家族からのメッセージカードを通して考える家族～
③衣服について考える～自分に似合う色・衣服を通して考える自分～
④卒業前に～ファッションショー～
⑤家庭科を学んで～これまでの自分これからの自分～

９年生のはじめの授業で，家族について考える時間をとった。授業での大きな問いは「家族って何だろう」である。そして，７・８年生での学び全体を写真などを使ったパワーポイントで振り返らせてこれまでの学びが家族とつながっていることを意識させた。そして，自分たちが幼少期に同じように，中学生のお兄ちゃんお姉ちゃんと共に遊んだ頃の写真も提示して「自分」を見つめさせる時間もとった。家族について考えさせた次時に，感想のいくつかを紹介した。そして，昨年度１年間交流したペア幼児とその家族の方からのメッセージカードを渡して，改めて次のことを考えさせた。「昨年ペア幼児とふれあいました。その子を育て支えておられる家族のメッセージを読み，前回の家族についての授業も思い出しながら，感想を書いてみよう。」と投げかけた。


家族というものは、あたりまえのもの、だという考えがあったりして、感謝の気持ちがあまりなかったけど、この時間に、みんなの幼いころの写真を見たりして、自分もこういうような時期があったのだと感じ、自分がいままで、成長できたことに、感謝の気持ちがあふれてきた。

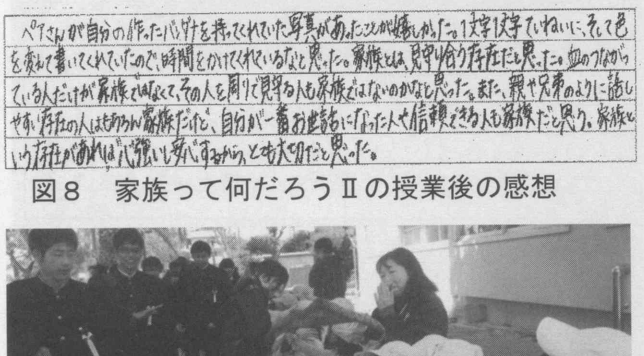
生まれた時からずっとお世話になっているとても大切な存在。これから私がやろうと思うことは家庭科で習った「食」「衣」などできることがあれば手伝ったりして感謝を伝えたい。そして今までお世話になった分のお返しをしたい。家族はこれからもずっと関わる人なので親の健康を確認してあげたり、コミュニケーションをとったりして大切にしていきたいと思う。

今まで私は、反抗的な態度をとっていました。だけど、今回家族とは何か考えた時に、いつでも支えてくれている大切な人だと思いました。本当に感謝を改めてしました。これから自分は、お母さんは、仕事をして家事をしてと大変だと思うので、帰ってから自分から、そっせんして行いたいと思います。1番頼りにしてくれて、優しくしてくれたことをきちんとありがとうの気持ちを伝えたいなと思います。近々母の日、父の日があるので、伝えて、自分が家事をある程度こなせるようにしたいです。

図５　家族って何だろうⅠの授業後の感想

図６　ペア幼児とその保護者からのメッセージⅠ

図７　ペア幼児とその保護者からのメッセージⅡ


今回は バンダナを 必死に作って、とても良かったと思いました。母親からは 10行くらいの 手紙を書かれていてとてもやりがいがありました。交流の時は あまり話さなくて心配していたけど 実ではたくさん話してくれていたのでうれしかったです。手紙の中で過去の交流のことについて思い出せて自分たちは家族であるのは何でも伝えて素直な気持ちを伝えあえるかんじと改めて再認識することが分かりました。

ペアさんが自分の作ったバンダナを持ってくれていた写真があったことが嬉しかった。1文字1文字ていねいに、そして色を変えて書いてくれていたので、時間をかけてくれているなと思った。家族とは、見守り合う存在だと思った。血のつながっている人だけが家族ではなくて、その人を同じで見守る人も家族ではないのかなと思った。また、親や兄弟のように話しやすい存在の人はもちろん家族だった、自分が一番お世話になったり、信頼できる人も家族だと思う。家族という存在があれば心強いし安心するから、とても大切だと思った。

図８　家族って何だろうⅡの授業後の感想

図９　卒業式　バンダナを手にしたペア幼児に見送られる様子

卒業式後に学舎を旅立つ場面で，家庭科の時間に作ってプレゼントしたバンダナをペア幼児が振りながら，お兄ちゃんお姉ちゃんを見送るシーンが昨年度はじめてあった。

卒業式前に幼稚園の先生が幼児の保護者へ呼びかけて下さった。そしてバンダナを持ってきて，お兄ちゃんお姉ちゃんの旅立ちをそれを振りながら見送った。

７　中学校最後の家庭科の授業で自分を見つめる場面

最後の授業では表１のカリキュラムにあるようにショートパンツのファッションショーを行った。目的は，完成の喜びを表現し個性に応じた着装の工夫について交流することとこれまでの家庭科での学びのふり返りである。生徒は，いつもと違う仲間の姿を見つけ，今の「自分」についても考えるよい機会となった。最後に，これまでの家庭科の学びについて問いかけ「家族」を見つめる機会を作った。そして，中学校３年間の家庭科の感想を書かせた。この中に，研究の目的で述べた「家族」に視点をあてて授業をおこなったことが生徒の意識の変容として現れていると思われるものを以下に示す。

感想１　交流会で地域の方と交流するために料理を考えてバランスよく作ったり、幼稚園児さんと触れ合ったり、9年でミシンを使ってパンツを作ったり色々なことを体験しました。その中で一番思ったことがあります。それは「家族」の存在です。交流会も園児さんともミシンだって自分の親だったらこう思う、こうするだろうという風に考えて行動しました。3年間で「家族」の重みを改めて感じました。

感想２　家庭科の授業で学んだことで家の人に教えたり教えてもらったりと色々なことを話せた。一番話せたことは地域の方との交流会で家で試し作りをしたこと。家で作った時に～を増やした方がいいんじゃないかと教えてもらった。ふだんから作っている分色々なことを知っていた。色々学んだことを生かしたい。

感想３　家庭科はあたりまえの日常をふり返るよい機会になったと思います。そうして振り返る事で今後の物事に向ける目を変えることができるし、感謝をすることも覚えれたのは親孝行にもつながると思う。実際、最近家事の手伝いをするようになった。製作にも興味を持ち、物置からミシンを引っ張り出しポーチを作ってみた。ショートパンツを作った経験はとても大きく楽しくできたと思う。

感想４　７年の時はあまり家族とか考えてみなかったけど，８年の幼児の学習で私も昔はこんな感じにトイレにも行けなかったんだなここまで育ててくれたのは両親・兄だったんだなあと改めて思いました。小さい頃私はご飯を食べても吐いていたらしくてそれでも毎回ご飯を作っていたと母が言っていました。色々感謝したいと思った。

感想５　いつもの家での出来事も家庭科と関連づけたら色々な意味があると分かった。調理実習で習ったことは特に日常生活に活用できると思うから時々母の手伝いをしたい。ショートパンツの製作を通して苦手だったミシンもアイロンも楽しいと思えるようになった。できることは自分でやるようにしたい。

感想６　家庭科では家族についても考えた。母一人で頑張っている姿を思うと，ここまで自分を育ててくれたことへの感謝とこれからは自分が支えていけるまでに頑張らないといけないと思っている。

感想１～６のように「自分」や「家族」を見つめて考え，それをこれからの自分の生活に生かそうとする感想を書いた生徒が約半数いた。

表２　家庭科の学びに対する意識

家庭科の休み中の家庭での実践課題（地域の方との交流会の試し作りなど）がきっかけで家族と話しをしたりしましたか。（回答：9年生81名）		ペア幼児の家族からメッセージをもらったり手紙を書いたりした活動を通して自分の幼い頃や家族について考えたりしましたか。（回答：9年生81名）		家庭科の学びの内容についてなぜ学ぶのかどう生かすのかなどの「学ぶ意義」を感じることができましたか。（回答：9年生77名）	
	生徒数		生徒数		生徒数
よくある	31	よく考えた	29	しっかりと見いだせた	40
ある	41	考えた	36	見いだせた	33
どちらともいえない	7	どちらともいえない	9	どちらとも言えない	3
あまりない	0	あまり考えなかった	5	見いだせなかった	0
全くない	2	全く考えなかった	2	全く見いだせなかった	1
合計	81	合計	81	合計	77

また，９年生全員に表２のような意識調査もおこなった。この表からも分かるように，授業の中で「家族」を意識して考えさせる取り組みを重ねたことで，多くの生徒が学ぶ意義を見出し，自分や家族を見つめていることが分かった。

しかし，考えるべきは肯定的に受けとめている多くの生徒の感想や意見だけではない。その授業の中で，「家族」に関して考えたくない生徒がいたり，配慮を要する家庭環境にいる生徒もいる。表２で「全く～ない」と答えた生徒の理由を読んでみると「家族は自分の気持ちを分かってくれない」「家族は好きではない」「家庭科の授業と自分の家族は別に考える」という理由を書いていた。こうした生徒への配慮も考える必要がある。

ここまでは，現カリキュラムとその中の家族についての学びを中心にまとめてみた。さらに，ここまで考察してきた取り組みの内容を構想図としてまとめ，成果と課題を整理して今後へつなげる。

８　家族について学ぶことの意義

近年の社会の人間関係は年々希薄になり，家庭の機能も低下している。それは，孤食化という言葉に代表されるように，食事の時に家族全員がそろうことがない家庭が多い。本校においても，子どもたちの様子からそのことを感じる。携帯電話の所持率も上がり，家族といても会話がなく，別々の誰かと会話をしていたりする。このような現状で育った子どもたちは，家事労働も経験せぬまま，家族の中で支えられた実感や家族のために何かをするという実感が減っており，年々調理実習などでも調理技能の低下を感じている。

このような現状だからこそ，家族について学び，自分を見つめ，家族をはじめとする多くの人とかかわることの意味を見出す必要がある。家族の理想的な形を教えるのではなく，子ども自身が「どうあるべきか」「どうしたいのか」を考えるきっかけを授業の中で設定していく。

家族について，その働きなどを数時間で学ぶプランに加え，家族についての学びを系統的に整理

し授業を構成していくと，家族について考える要素がたくさんあった。改めて授業のあしあとを見直し，子どもや家族の言葉などからそれを確認できた。それらを整理して図10に構想図を示した。この図にあるように，家族について考えることは自分を見つめる活動を大前提とする。自己理解が深まってこそ，多くの人に支えられていることに気付き，人と人とが支え合って生きていることを実感できる。家族に関して中学校1年生のはじめにガイダンスとして取り上げることが望ましいが，それに加えて，9年生では自分や家族について3年間の衣食住・消費などの内容とつなげて考えさせるとより深まる。自分を見つめ，家族を見つめるには，自己理解も深まり様々な経験をし，将来も見つめることのできる中学校3年生という発達年齢が適切であると考える。そして，家族について考える場面で配慮を要する場合でも，年齢が上がるにつれて，子ども自身がその状況を受けとめている場合が多くなる。例えば，感想6を書いた子どもは，家庭科での学びをきっかけに親へ目を向けて今後の自分のことを思い描いている。

家族については，このように3年間の一連の学びの後で，自分の人生も振り返りながら，今まで学んだことを改めて関連づけて考え，希望（のぞみ）の時間や道徳，あるいは他教科とも関連させて生き方に触れる学びにすると，本当の意味で自立と共生の力を育む家庭科の授業になると考える。

9　成果と課題

・家族という視点から，学習内容を見直し整理し「自分」「家族」を土台とした基本的な考え方を構想図に表すことができた。今後の指針としたい。

・家族を意識して取り組むことで，子どもたちも学びの内容を自分や家族とつなげて考え，自分にできることは何かを考える姿があった。

・家庭環境は一人ひとり異なるので，プライバシーにも配慮をしつつ，広く社会の状況にも目を向けさせる。9年生では年間通じて新聞の中からくらしに関係する記事の切り抜きとその内容との自分とのかかわりを考え文章にする学びを続けている。こうした学びを土台とし，家族のあり方は多様であることを理解させ，幼児や高齢者とのかかわりなど広く地域社会とのつながりの中で自分や家族を見つめる題材を今後も開発していきたい。

＜参考文献＞

1）牧野カツコ：「人間と家族を結ぶ家庭科ワークブック」，p3－7，1997，国土社

2）南野忠晴：「新しい家庭科勉強法」第2章家族の中で生きる，2011，岩波ジュニア新書

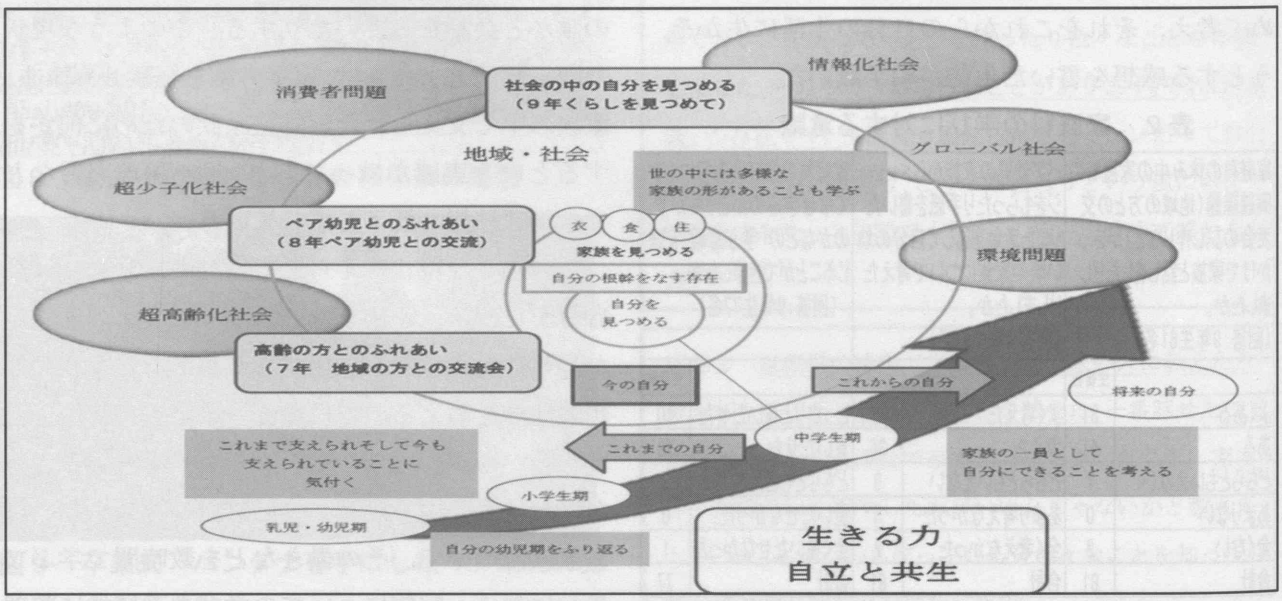


図10　自分・家族を見つめる家庭科の学び